□■□■□■□ わが社の「金型マスター」■□■□■□■

株式会社　エムエス製作所
（愛知県清須市）

江口　博保さん（設計技術部門　技術長）
深見　克彦さん（技術部加工技術部門　技術長）

左から，深見克彦さん，迫田幸博社長，江口博保さん

車のウェザーストリップ用金型で，高い評価を得ている㈱エムエス製作所。愛知県清須市の本社のほか，中国，インド，インドネシアなど海外５拠点を有する企業だ。ちなみにウェザーストリップとは，車のドアの周囲を囲む，ゴム製のシール材のこと。車内への風雨の流入を防ぎ，ドアを閉めた時の衝撃緩和にも役立っている。

実はこのウェザーストリップ，あらかじめ押出成形された直線部分を必要寸法で切断し，金型に挿入してコーナー部分のみ成形することで，製品となる。そのため顧客立ち合いによる成形トライでは細かい調整が求められる上，昨今はこのウェザーストリップも樹脂化が進んでおり，金型加熱時の膨張を配慮した調整なども必要になってきた。

また最近の傾向として，遮音性などこれまでにない機能が求められる一方，部品点数削減が進み，２金型で対応していた部品を１金型で製造するケースも増えてきた。同社では要求性能を満たしつつコストダウンを図る取り組みを設計段階から行っているが，さらにこうした金型数の減少に備えて，自社ノウハウを活かした新市場開拓，金属加工技術を活かしたゴルフクラブの製造販売など，事業の多角化にも取り組んでいる。中でも最近は，表面処理条件の最適化研究を重ね開発した離形性向上技術「MSプロセッシング」が，１年間で大手を含む50数社の新規顧客獲得へとつながった。コロナ禍の中，同社に大いに希望を与えたという。

国家技能検定へのこだわり

「最も大事な経営課題こそ，人材育成に他ならない」と考える同社では，技術者教育でも特徴的な取り組みを行っている。中でも印象的なのは，国家技能検定へのこだわりだ。迫田幸博社長は「当社では，国家技能検定１級を１つ持っていても自慢にはなりません。それは単なる入り口に過ぎず，その上さらにいくつ持てるかを考えるようにしています」と語る。

「入社した子たちには，“お前たちは暴走族だ”なんて言っているんですよ」と迫田社長。バイクの運転はうまくても，ライセンスがなければただの乱暴者に過ぎないというわけだ。しかしライセンスを取れば自分の力を客観的に示せるし，顧客の見方も全然違う。特に海外では，ライセンスの有無が想像以上に自分への評価に影響するという。

今は社内で６人が国家技能検定に向けて勉強を行っている。そんな彼らの良き指導者であり，同社技術者集団の先頭に立って活躍するのが，今回ご紹介する江口博保さん，深見克彦さんの二人の金型マスターだ。

製造業務を経験し，設計・提案に説得力

江口さんは設計者として，顧客打ち合わせや３D

（左）設計業務を行う江口さん。業務，行動，情報のすべてにおいて「確実」であることを心掛けているという
（右）技能検定の指導を行う深見さん。整理整頓や日常点検など，安全面を含めた基本を大切に指導している

モデル作成，部材発注，トライ立ち合い，成形品検査など一連の作業を行っている。国家技能検定の特級を２職種，１級を３職種取得し，平成28年に「あいちの名工」の表彰を受けたという実力の持ち主だ。今は「現代の名工」を目指しているという。仕事のやりがいについてお聞きしたところ，「コストや工数削減，新しい機構の実現などを達成していく面白さが設計にはあります」と答えてくれた。

実は江口さんは入社後10か月ほど，仕上げ工程で汎用フライス，NC放電加工，磨き，TIG溶接，組付けなどの作業を経験したことから，製造部門の作業にも明るい。製造部門の深見さんによれば，現場と設計のやり取りも江口さんに間に入ってもらうことで，理解度が全く違ったものになるそうだ。またそうした経験は，社内の改善提案はもちろん，顧客への提案も説得力あるものにしているという。

「設計業務について間もないころ，講習会で言われた『設計者は１人で設計ができるまでに10年，自分の設計ができるまでに20年，お客さんと話ができるようになるまでには30年掛かる』との言葉が，最近ようやく実感できるようになってきたんです」と江口さん。大半は失敗の経験とのことだが，それらを育成に時間のかかる設計者教育に役立てていきたい考えだ。「人材育成は，“手取り，足取り，口移し”。手順書やマニュアルも確かに有用ですが，それだけを見たらできるというものではありません。また指導するにあたっては，その人がその業務ができるようになって初めて，伝えたことになると考えています」（江口さん）。

独自の発想で，仕事にも面白さを

一方深見さんは，現在は金型製作から離れ，主に人材育成と新規事業の開発を担当している。こちらも国家技能検定１級を６つ，特級を１つ取得した，製造技術のエキスパートだ。しかしその一方で，柔軟な発想を持ったアイデアマンであり，前述のゴルフクラブの開発などにも大きくかかわった。

配置換えから間もないある日，外部の立場で現場を見ていた深見さんは，なぜか「作業者がロボットのように見えたことがあった」という。「もちろん集中するのはいいことですし，気のせいかもしれませんが，“やらされてる”感だけではない，仕事に面白さを見出せる仕掛けはないかと考えました」（深見さん）。

そこで深見さんは作業者に対し，ウェザーストリップの防水の仕組みと金型部位との関係を，現物を見せながら詳しく教えることにした。近年は作業も分業体制になり，各自が完成品のイメージを持ちにくく達成感が得られないためだ。また自らの担当する新規事業開発を新人教育にも導入し，アイデアを出してもらうことにした。考える面白さを感じてもらいながら，広い視野でヒントを探す眼や好奇心，発想力を養っていくという。

技能検定の指導については，「恥ずかしながら特級を取るのに10年かかりました。どこが悪かったのかと考え，間違った部分を確実に習得することだと思い至ったので，教育にも取り入れています」とのこと。間違った部分は繰り返し覚えさせ，テストを行うなどして習熟度を上げている。また実習面では検定期日前に加工サンプルを３サイズ加工させてみて，どこが良く，どこが悪かったかを評価し指導している。

同社が検定に力を入れ始めてから20年，「継続は力なり」で毎年ステップアップを重ね，国家技能検定特級の取得者を各拠点に配置できるようになってきた。迫田社長はこうした強みをさらに伸ばしていく上でも，彼らが自らの経験を伝え，若い人たちを育ててくれることに，大きな期待を寄せている。